



## Contents



特集：日本アンチ・ドーピング機構（JADA）× SPORT FOR TOMORROW

スポーツに対する新たな視点を提供し、継続的なムーブメントに。 \_\_\_\_\_ P.2

「2015国際アスリートフォーラムfor 2020」レポート \_\_\_\_\_ P.3

連載コラム「開発とスポーツ」 \_\_\_\_\_ P.4

SPORT FOR TOMORROW 活動事例・新規会員 \_\_\_\_\_ P.5

スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局からのお知らせ \_\_\_\_\_ P.6

SPORT FOR TOMORROW 今後の主な国内でのイベント予定 \_\_\_\_\_ P.6

「スポーツ・フォー・トゥモロー」は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催国として日本政府が推進する、スポーツを通じた国際貢献事業です。外務省とスポーツ庁の連携のもと、官民が協力して日本の力を集結。世界のあらゆる世代の人々にスポーツの価値を伝え、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントを広げ、スポーツの力でよりよい世界を創ることを目的としています。期間は2014年から2020年までの7年間。開発途上国を中心に100カ国以上・1,000万人以上を対象に、スポーツを通じた国際協力、スポーツの人材育成、アンチ・ドーピングの普及啓発を推進していきます。

第2号となる本号では、「国際的なアンチ・ドーピング体制の強化支援」の実施主体である日本アンチ・ドーピング機構（JADA）の取り組みや、「スポーツと国際貢献」に関するコラム、最新の活動事例などをご紹介します。

スポーツ・フォー・トゥモロー（以下、SFT）の3本柱の1つである「国際的なアンチ・ドーピング体制の強化支援」について、その実施主体である日本アンチ・ドーピング機構（JADA）の浅川伸専務理事に、SFTC事務局ディレクターの河原がお話を伺いました。

特集：日本アンチ・ドーピング機構（JADA）× SPORT FOR TOMORROW

## スポーツに対する新たな視点を提供し、継続的なムーブメントに。

（河原）：JADAさんにはSFTコンソーシアムの開始当初から運営委員として関わっていただいておりますが、SFTのプログラムが開始されてから、ご自身の想いに変化などはありましたでしょうか。

（浅川）：SFTがオリンピック・パラリンピック競技大会のレガシープロジェクトとして立ち上がり、運動や健康といった側面を超えたスポーツが持っているポテンシャルを最大限引き出そう、スポーツが身近にあるとはどういうことかを議論していこう、といった期待が広がってきていると感じます。

かつて筑波大学の社会人大学院に通っていた時に、田中ウルヴェ氏の「子どもたちが育っていく過程においてあからさまな負けを経験できる器は社会においてスポーツ以外ない。スポーツは安全なルールで守られながら、時には努力しても勝ちにつながらないという世の中では当たり前前のことが経験できる」という意見を聞いて、スポーツの価値について考えさせられた経験があります。その頃、私は日本にいてドーピングの取り締まりといったイメージが強いアンチ・ドーピング活動が、ヨーロッパの人たちと話しているとそれだけではなく、それらの違いについて修士論文にも書きはじめていたので、田中氏の話がすごく心に刺さったのを今でも覚えています。

SFTは、そのようなスポーツの多面性への気づきを提供できていると感じています。例えば、国際武道大学の先生からカンボジアでの運動会開催のお話を伺った時に、日本で自分の子どもの運動会を見に行っても気がつかない運動会の機能に気づかされました。その機能を分析して、実践されている方のお話なので、とてもよく伝わってきました。このようにスポーツの価値を分かりやすく伝えていくことが、SFTを通してできるのではないかと感じています。海外でプログラムを実施して、現地の人たちがこのように変わってきたという情報が日本にフィードバックされることによって、日本ではまだ見えていないスポーツの価値に、改めて気付かされるということが今後起きていくのではないかと考えています。

（河原）：国際協力や国際貢献と言うと、海外での活動がメインになってきますが、海外で活動することで日本でも気づきがある、という点にとても共感します。では次に、アンチ・ドーピング活動が単にドーピング検査を行うといった活動だけではないことを、SFTの中で学ばせていただいておりますが、アンチ・ドーピングに関する世界での日本の立ち位置やどのような国際貢献を目指されているかについて教えてください。

（浅川）：世界のアンチ・ドーピング活動を見ていくと、2009年に世界アンチ・ドーピング規定が改定されて以降、教育の重要性を訴えるメッセージが中心になってきています。例えば、以前は「Catching The Cheat（不正行為を捕まえよう）」といったメッセージが出されていたのが、現在では「Protecting Clean Athlete Right（アスリートの高潔性を守ろう）」といった標語が掲げられるようになってきています。このように、社会に対してアンチ・ドーピング活動を行う主体が発するメッセージが変わってきています。日本は、一般国民が注目するようなドーピング違反者が毎年出てくるわけではないため、アンチ・ドーピング活動とはどのようなものかを発信しづらい国と言えます。そのような中で、SFTが始まったことで、アンチ・ドーピング・ムーブメントとは何を提供するムーブメントなのか、オリンピックムーブメントとの関連の中でアンチ・ドーピング・ムーブメントが担っている役割は何かを発信していく

機会をもらったと感じています。それは、JADAとして何を作りだしていくかにもよりますが、SFTの3本柱で連携することにより、とても相乗効果があると考えています。

（河原）：分かりやすい発信に加えて、具体的に2020年までの間で実施したいプロジェクトなどがありますでしょうか。

（浅川）：我々がSFTの中で行っている活動に、諸外国でのキャパシティディベロップメントというものがあります。アンチ・ドーピング活動は、限られた予算の中で何から始めるかと言えば、ドーピング検査を中心とした検査員の養成などからということが一般的です。JADAもそうでしたし、今リーディングランナーになっている国もそういうステップを踏んでいます。例えば2018年のアジア大会に向けて、開催国のインドネシアが最も欲すると思われるサポートは、概念的にスポーツはすばらしいという話よりも、DCO（Doping Control Officer：検査員）の養成であり、そういうことももちろんやっていきます。OCA（アジアオリンピック評議会）のオフィシャルゲームは様々あり、規模もそれぞれ違いますが、ドーピング検査のキャパシティのない国にとっては、100検体の検査をするのも、10検体の検査をするのも大変なので、それらを支援することは大切です。

ただ、検査だけでなく、なぜそれが必要かを、アスリートにもコーチにも分かってもらって、その上で、大会の成功にはアンチ・ドーピングが必要という大きな概念まで引き上げていくことは、DCO講習会だけではなかなか達成できません。JADAにある複数の部署で、連携しながらやっていきたいと思っています。

（河原）：現地のニーズには応えないといけないので、DCOの養成支援などは行っていく。しかし、それだけではなく、なぜそれが必要かを伝えていくことで、その国にもレガシーを残していくということですね。JADAとしてSFTに期待していることは何かございますか。

（浅川）：SFTは、オリンピック・パラリンピック招致を契機として決まったプロジェクトですが、世界的にはテンプレートがないわけではなく、ロンドン大会の際に行われたInternational Inspirationや、局所的にはすでにJICAが長年取り組んでいます。そういう意味では、JADAは規模感も小さいですし、社会的な認識も含めてまだ後発の組織なので、良い意味で、SFTで作られる機会を活用していきたいです。

今たまたまアンチ・ドーピングが社会の注目を集めていますが、それはテロがあってから、皆が安全の大切さに気づいている状態と同じであって、あまり良い循環の中でフォーカスされているとは言えません。対して、ラグビーワールドカップでの日本の活躍を見ても、スポーツには一気に世の中を変えるようなインパクトがあることは間違いないですから、スポーツで社会を良くするフロントランナーの活動が、もっと社会から注目されるようになり、そのプロジェクトの一翼をJADAが担っ



公益財団法人  
日本アンチ・ドーピング機構  
(JADA)  
専務理事 浅川伸氏



ているといった形で、メディアにも扱ってもらえたらと思っています。JADAが新しい取り組みを始めると言ってもなかなか世の中のニュースにはならず、今回のロシアのようなドーピング違反に関する話題ですと、多くのメディアも注目します。SFTを通して、違う側面からJADAも取り上げてもらいたいと思っています。スポーツで社会を変えていこうという国が主導するムーブメントですので、1年に1度くらい、多くの人にその「熱感」が伝わるイベントを開催してもいいのではないかと思います。

(河原) : JADAさんには、スポーツ界のネガティブな側面にアクセスしなければいけないところもあるかと思いますが、本来であればそういったことが起きないようにすることが究極の目標で、“Further Promote Sporting Value (スポーツの価値を促進する)”といった標語のもと、良い循環の中でJADAさんが注目されると良いですね。

(浅川) : 外務省・スポーツ庁・民間企業・大学などの連携の中で、SFTのムーブメントをもっと知れ渡らせることができるようなイベントができるとうれしいですね。また、コンソーシアムがせっかく立ち上がったのですから、このチャンスを生かそうという熱い思いが、自分たちも含めスポーツ界から発せられると良いと思います。

(河原) : 先ほどSFTの三本柱の効果として「相乗効果」といった話がありました。コンソーシアム全体をどのように捉えているか、他の団体とどのように関わっていきたく教えていただけますか。

(浅川) : JADAの中でも、SFTに中心的に関わっているメンバー以外では、日本としてオリンピック・パラリンピック・ムーブメントに関わっていくというメッセージとの親和性を感じられても、それ以外の団体と

どう関わるかについてはなかなか理解されにくいと思います。ただ、JADAのネットワークや接点は、他の団体でも活用できるものだと考えています。一例として、各国に支援に行った時に、その国の要人が迎え入れてくれることはかなり多いのです。ヨーロッパに行けばロイヤルファミリーがいたり、アジアの発展途上国では、NOCの集まりに政府の要人がいたり、スタジアム建設などのインフラの話もありますので、日本という国土交通省のような組織の要人がいることもあります。我々はそういった方々と接点を持てるので、外交的な側面から、日本のプレゼンスや貢献を示す上では連携が図れると思います。

(河原) : 最後に、2020年以降にどのような状況になっていたら良いというイメージはお持ちでしょうか。SFTを通じて、どのようなレガシーを残したいと考えられているか教えてください。

(浅川) : 「スポーツを通じた国際貢献」「スポーツを通じた社会貢献」といった、スポーツに対する新たな視点を提供し、2020年までに、その視点が人々にとって当たり前になっている。そして、2020年以降もこのムーブメントを維持していこうという世の中から声が出ている状態を実現できればと思っています。継続するために一緒にやっていこう、政府予算が出ないなら、それをNGOやNPOで回そうよ、といった機運が、世論として出てきたら素晴らしいと思います。

SFTで発信しようとしているメッセージは、まだまだ社会の中で当たり前のことではなく、それを高める余地はいくらでもあるので、このムーブメントを継続する熱が高まっていれば良いと思います。このコンソーシアムを、内部だけでなく、外部も欲しがっている状態が作れたら素晴らしいですね。

## 10月1～2日 「2015国際アスリートフォーラムfor 2020」 レポート

～スポーツを通して、アスリートから世界へ、未来へつなげよう：2020年へ、その先へ続くメッセージリレー～

スポーツ庁開設の日でもある2015年10月1日から2日にかけて、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）の主催により、「2015国際アスリートフォーラムfor 2020」が開催されました。

アスリートがスポーツの価値・力を育むための担い手になることができるのかといったテーマのもと、ロールモデルアスリート、ユースアスリートらを中心としたカンファレンスと、ワークショップ形式の2日間にわたり実施されたフォーラムです。

10月2日には、日本のユース世代のアスリートが、国内外のロールモデルアスリート、リーダーアスリートと共に、スポーツの価値を考えるアクティビティに参加。JADA/WADAアスリート委員、東京2020組織委員会スポーツディレクターの室伏広治氏が考案した、“New MO!”という、相撲を「新しいスポーツ」として紹介するプログラム等に取り組みました。

スポーツを育てていく「未来のリーダー：Leaders of Tomorrow」約100名が参加し、未来のスポーツへのメッセージを世界へ発信しました。



### 「PLAY TRUE トーチリレー」

一過去・現在・未来へつなぐ、人と自分をつなぐ、スポーツの“Truth”

スポーツ、そして自分自身の中にある「真なるもの—Truth」のメッセージを、2020年へと継続してつなげていくプロジェクト。日本で伝統的に使われてきた「絵巻物」に、波状に向かい合う2本の曲線からなる「立涌（たてわく）」の文様とし、アスリートたちの「Truth」を、世界へ、未来へとつなげるものとして、果てしなくつながっていく立涌で表しています。PLAY TRUE トーチリレーでは、世界で一つの実物の巻物トーチに、アスリートの「Truth」のメッセージを載せ、2020年までつないでいくこと、そしてウェブを介してアスリートの感じる“Truth in ME, Truth in Sport”を世界に発信していきます。

PLAY TRUE トーチリレー・プロジェクトサイト  
<http://playtrue2020-sp4t.jp/torchrelay/jp/index.html>

PLAY TRUE 2020、Sport for Tomorrowでは、無限の「スポーツの価値・力」にかかわるメッセージを未来へとつないでいくプロジェクトを推進しています。スポーツを通じてより良い未来を創るため、スポーツの価値を伝え、スポーツの価値を守り育むこと、そしてそのための持続可能な環境を整備し、推進することを目的としています。

## 連載コラム「スポーツと開発」第1回

## 世界を代表する「スポーツを通じた国際貢献」組織

人を貧困から救うのはなかなか容易なことではありません。というのも、先進国による途上国への経済的な援助は、外部機関からの援助物資が供給されるのを待つ依存意識を強め、ときに途上国の人々自らが主体的に暮らしを改善しようとする意思を萎えさせてしまうからです。いわゆる「援助依存」の状態を作り出しかねません。また行政機構の機能が乏しい途上国では、行政の空白状態を埋めるためのシステムを構築しようと住民自身による組織作りを目指し、住民参加、保健衛生、教育など様々な支援プログラムが展開されてきていますが、こうした試みも、行政への積極的な参加を促すまでにはなかなか繋がってこないのが現状です。このような状況において、スポーツはそうした問題にどのように貢献することができるのか。近年、開発問題とスポーツを連動させて展開し、そのなかで民族を融和させたり、教育や健康への意識を高めたりしようという取り組みが世界各地で開始されてきています。

なかでもこうした活動の代表として世界的に知名度が高く、よく取り上げられるのが「マザレ青少年スポーツ連盟 (Mathare Youth and Sports Association: 以下MYSA)」です。MYSAの活動は、1987年、ケニアの首都ナイロビ近郊のスラム街に、国連環境計画で活動していたカナダ人の一人が、現地で人気が高かったサッカーに目を付け青年たちを組織化したことに端を発します。不安定な生活環境の中、よれよれのボールでプレイするのが日常的であった若者たちにとって、異国の人が持ち込むサッカーのやり方はとても新鮮でした。リーグ戦では、試合結果での勝ち点のほかに、居住地域の清掃活動 (クリーンアップ・プロジェクト) を通じて地域貢献をしたチームにも勝ち点が与えられ、それがリーグ戦の順位に反映されるようになっていきます。「レッドカード」となった選手は、年下世代の試合の審判を6試合以上担当しなければ試合に復帰できず、スポーツマンとして卓越した振る舞いが認められた者には、レッドカードとは反対に「グリーンカード」が授与されたりもします。このグリーンカードにはポイントがあり、そのポイントは奨学金を獲得する際の査定ポイントとして換算され、高等教育機関への進学を志す者にとって、進学資金獲得のまたとない機会を提供しています。スポーツを通じてルールを遵守するような規範を植えつけながら、貧困に苛(さいな)まれる若者たちを社会に参画させるというかたちで現地の人々との関係を新たに構築していったこの活動は、地域貢献に対する関心を高め、他者への思いやりの涵養にも結びついてくる画期的な育成方法として世界的に注目され、のちにノーベル平和賞の候補にも名前が挙がるほどになりました。

こうした「スポーツの力」を活用しようとする動きは、その後、オリンピックで活躍したアスリート達の間にも広がりを見せることとなります。1990年代に入ると、リレハンメル・オリンピックのスピードスケートで金メダリストを獲ったコス (Johann Olav Koss) を中心とするアスリート達が、「スポーツを通じての人的支援」という理念のもと、途上国の開発問題に積極的に関わる事業を開始します。その組織は「Right to Play」という名前で「スポーツによる国際貢献」の草分け的な組織として、現在世界20カ国以上で活動を繰り広げています。スポーツやプレイを教育や健康へ向けたツールとして捉えながら、様々な人生の教訓やリーダーシップ、チームワークなどのライフ・スキルを伝えようとするRight to Playの取り組みは、次のような行動指針に基づき活動されてきました。

## Right to Playが掲げる行動指針

## WE CARE (我々はケアする)

- 我々は、子どもたちとコミュニティをケアする
- 我々は、自分たち自身とお互いに気を配る

## WE PLAY (我々はプレイする)

- 我々は、何をするにも陽気に楽しむ
- 我々は、スマイルとよろこびのために時間を割く

## WE COMMIT (我々はコミットする)

- 我々は、自分自身に忠実であり続ける
- 我々は、正直かつ誠実にふるまう
- 我々は、約束を守る

## WE ARE A TEAM (我々はチームである)

- 我々は、多様性を認め協力的であり、同じ立場に身を置くのであって、敵対するものではない

## WE DO (我々は行動する)

- 我々は、やればできるという気持ちを共有する
- 我々は、何も無いところにも機会を創出する
- 我々は、インパクトをもたらすために一生懸命頑張る

社会から断絶され、自立へ向けた若者の成長の芽をどう育んだら良いのか、皆目見当がつかないという実情の中で、社会的包摂 (これを「ソーシャル・インクルージョン」と言います) の恩恵に浴していない青少年たちと向き合おうとするRight to Playの行動指針は、社会参画の手段としてスポーツを位置づけようとする点で、先のMYSAと共通します。すなわち、MYSAやRight to Playを世界的に有名にしたのは、表層的にはスポーツや身体活動の実践をしながら、深層の部分で地域内のソーシャル・インクルージョンを進展させるといふ、それまでの支援事業のジレンマを解消する有効な方法論を示したからに他なりません。社会的に不安定な境遇をスポーツで打破しようとするこれらの足跡を、我々はどうのように受け継いでいけばよいのでしょうか。スポーツを通じた国際貢献を掲げるSport for Tomorrowの重要な課題であり、それに賛同する会員の皆さんに投げかけられた大きなテーマのひとつでもあります。

筆者紹介 小林 勉 (コバヤシツトム)



中央大学総合政策学部教授。  
主な研究領域は、国際協力論、スポーツ社会学。  
2001年名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程修了。学術博士 (名古屋大学)。1995年から1997年の間、ヴァヌアツ共和国のサッカーナショナルチームの指導に従事し、数々の国際大会と現地でFIFA (国際サッカー連盟) の途上国支援事業に関わる。2004年より現職。2010年よりラトロップ大学 (メルボルン) Centre for Sport and Social Impactの特別研究員も務める。  
SFTでは、SDP調査研究プロジェクトプロジェクトメンバーやプレスセミナー講師などを務めている。

## スポーツ・フォー・トゥモロー認定事業

### 活動事例紹介

SFTコンソーシアム会員による「スポーツ・フォー・トゥモロー認定事業」が着々と展開されています。引き続き、会員のみなさまからの事業申請をお待ちしております。

#### 2015年度「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた柔道の国際的普及、及び振興に関わる事業」



柔道教育ソリダリティーは、柔道の国際的普及・振興に関わる事業、柔道による文化交流・異文化理解の推進に関わる事業、柔道による青少年育成に関わる事業を展開し、多くの人的交流や、柔道器具の無償配布事業を展開しています。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた柔道指導者育成プロジェクトを2014年度からスタートし、海外選手・コーチの受入れ、指導者の海外派遣、柔道着や畳の無償配布等を実施し、柔道発展途上国の選手育成を支援します。

#### 2015年10月 福岡 「サニックスカップU-17 国際ハンドボール交流大会2015(第8回目)」



サニックスは、スポーツを通じた青少年の健全育成、普及と競技力の向上、国際的異文化交流を基本理念とし、様々なスポーツ国際大会を開催しています。本ハンドボール大会も8回目を数え、フランス・大韓民国・中華台北からチームを招請し16チームで大会を行いました。期間中は、海外チームと福岡大学による交流試合、参加チーム選手同士の交流会、参加チーム指導者及び大会関係者との交流会も実施しました。大会会場と宿泊施設が同施設内にあるので、競技だけでなく生活もともにすることでコミュニケーションが取れ、お互いの文化に触れ合い理解することができるのも本大会の特徴です。

#### 2015年11月 東京 「オランダ首相来日にかかる車椅子バスケットボールイベント」



日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック協会は、在日本国オランダ大使館との共催で、車椅子バスケットボール体験イベントを開催しました。「スポーツでつながる日本とオランダ」をテーマに、スポーツが健康・団結・自尊心を育むというメッセージを伝えることを目的に、オランダのマルク・ルッテ首相臨席のもと、日本・オランダの小中学生と選手を招待し開催されました。選手によるデモンストレーションでは車椅子のスピード感を目の当たりに、体験会では自身のシュートが入った時の感動を体感し、車椅子バスケットボールの面白さを実感した1日でした。

#### 2015年11～12月 千葉 「モルディブ・バドミントン女子選手強化支援」/ 外務省スポーツ外交推進事業



外務省スポーツ外交推進事業を、特定非営利活動法人アルファバドミントンネットワークと公益財団法人日本バドミントン協会が協力し実施しました。モルディブのバドミントン女子選手2名及びコーチ1名を招へいし行われた本事業は、千葉県の西武台千葉高校が主な受け入れ先となり、トレーニングを行うとともに生徒との交流も行われました。本取り組みは、SFTC交流会での意見交換がきっかけとなり実現したものです。

## スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム新規会員 (2015年9月11日～12月3日現在)

- ・ NPO法人 NGO活動教育研究センター
- ・ 大宮アルディージャ
- ・ オセアニア地区スポーツ支援機構
- ・ NPO法人 Kids One World
- ・ 国際せきずい損傷リハビリテーション協会
- ・ 国際文化交流協会
- ・ 国立大雪青少年交流の家
- ・ 一般社団法人 子どもスポーツ国際交流協会
- ・ 株式会社 ジェイティービー
- ・ ジェイワークアウト
- ・ シャンティ国際ボランティア
- ・ NPO法人 障がい者スポーツ Friendly Action
- ・ 公益社団法人 少年軟式野球国際交流協会 (IBA)
- ・ 株式会社 JIN
- ・ NPO法人 スマイルクラブ
- ・ 全日本テコンドー協会
- ・ 株式会社 デサント
- ・ 株式会社 電通
- ・ 名寄市
- ・ 独立行政法人 日本学生支援機構
- ・ 日本財団
- ・ 公益財団法人 日本ソフトボール協会
- ・ 一般社団法人 日本フレスコボール協会
- ・ 日本ホッケー協会
- ・ 一般社団法人 Non-Violence Project Japan
- ・ びわこ学院大学
- ・ 一般社団法人 ビースボールアクション
- ・ 一般社団法人 ふうせん遊び協会
- ・ 一般社団法人 北海道総合研究調査会 (HIT)
- ・ 一般社団法人 南アジア友好協会
- ・ NPO法人 Little Bees International
- ・ Little Bridge
- ・ 流通経済大学
- ・ NPO法人 ワールドランナーズ・ジャパン

以上35団体 (合計●●●団体) ※五十音順

その他の活動事例、会員一覧は、SPORT FOR TOMORROWホームページ ([www.sport4tomorrow.jp/jp/](http://www.sport4tomorrow.jp/jp/))にてご覧いただけます。



## スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局からのお知らせ

### 2015年9月18日「スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム交流会」を開催

参加者間のネットワーク形成、SFTC会員及び認定事業拡充を目的としたSFTC交流会を開催しました。当日は、SFTC会員団体57団体、入会にご関心のある10団体から総勢174名の皆様にご参加いただきました。この交流会では、会員の17団体に活動紹介をいただいた他、「会員団体の更なる連携を図るには」と題したパネルディスカッションを実施。日本パラリンピアンズ協会の大日方氏、日本サッカー協会の松永氏、日本卓球株式会社の千葉氏、筑波大学の清水氏に登壇いただき、会員間連携によるスポーツを通じた国際貢献の可能性などについてご意見をいただきました。

参加者からは「たくさんのプレゼンを聞く中でアイデアが浮かびました」「熱気があり、これからのスポーツを通じた国際貢献の可能性を強く感じました」などのコメントが寄せられました。

会場の各所で名刺交換や意見交換が行われ、活発にネットワークを形成なさっているお姿を拝見することができました。交流会がきっかけとなり入会された団体様や、会員間での新たな連携事業が形成されたとの嬉しい報告が寄せられています。今後も、このような場を設け、SFTCのムーブメントを拡大していくよう努めて参ります。



### 2015年10月3～4日「グローバルフェスタJAPAN2015」SFTCブースを初出展

グローバルフェスタは、NGO・公的機関・民間団体等が参加する、国際協力の分野では日本最大級のイベントです。フェスタでは毎年、屋外に何百というブースが出展され、参加団体の活動紹介や、各国の食べ物・文化紹介等が行われます。今年のフェスタはお台場で開催され、274団体がブースを出展、来場者数も10万人に上りました。この大規模なフェスタにSFTCブースを出展し、会員団体のパンフレット配布・活動紹介、紙芝居によるSFTC紹介等を行いました。また、車椅子バスケットボール用車椅子・アイススレッジホッケー用スレッジの試乗やゴールボール体験を行い、障がい者スポーツ分野での支援についても紹介し大いに賑わいました。

ブース運営はSFTC会員の外務省・JICA・国際交流基金・筑波大学(TIAS)・日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック協会・FC東京・日本国際協力システム・鬼ごっこ協会・国際文化交流協会・嘉納治五郎記念国際スポーツ研究交流センター・アルファバドミントンネットワーク・漫画家学会・日本パラリンピアンズ協会・日本アイススレッジホッケー協会と連携し実施しました。



## SPORT FOR TOMORROW 今後の主な国内でのイベント予定 (2016年1～3月)

### 【認定事業】2016年1月27～29日 国際アジア・オセアニア アンチ・ドーピングセミナー

世界アンチ・ドーピング機構・日本アンチ・ドーピング機構共催。会場は、1月27日、28日はJA共催ビル、29日は味の素ナショナルトレーニングセンター。2015年に全面改定された世界アンチ・ドーピング規程の運用、特にモニタリングに関するアジア・オセアニアの実務者対象セミナー。28日午後は実務家だけでなく、国内競技団体・メディアも対象とした、エンゲージメント（関係者との協働）に関するセミナーとなります。

### 2016年3月 第2回SFTC会員全体会

昨年度3月に開催しました全体会を今年も開催します。SFTCが発足し1年以上経ち、会員団体も100を超えました。会場は日本財団のご協力を得、同財団会議室で開催予定です。具体的日時やプログラム等は確定次第会員の皆様にご連絡差し上げます。

※各イベントにおける取材に関するお問い合わせは、SFTコンソーシアム事務局までお願いいたします。

SPORT FOR TOMORROWホームページにて、最新のお知らせや事業レポートなどを掲載しています。ぜひご覧ください。<http://www.sport4tomorrow.jp/jp/>

各種お問い合わせは、下記スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局までお願いいたします。

発行日：2015年12月21日